



Title	Relationship Among Twin Language, Twins' Bond and Social Competence
Author(s)	林, 知里
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46189
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	はやし ち さと 林 知 里
博士の専攻分野の名称	博 士 (保健学)
学 位 記 番 号	第 20180 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	Relationship Among Twin Language, Twins' Bond and Social Competence (‘twin language’ と双生児の親密性、社会適応の関係)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 早川 和生 (副査) 教 授 三上 洋 教 授 萩野 敏

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】双生児のことばの発達が単胎児に比べて遅れることの原因のひとつとして、双生児にみられる独立した言語体系が注目されている。この言語体系は、‘autonomous speech’ ‘secret language’ ‘criptophasia’ ‘twin language’ などと報告されているが、統一した名称や定義がなく、発生に影響を与える要因およびその後の双生児の発達に与える影響についてはほとんど知られていない。

【目的】研究Ⅰでは、この言語体系を「母親や他の大人には通じない双子独自のことば（‘twin language’）」と定義し、‘twin language’の発生に影響を与える社会的要因を明らかにすることを目的とした。研究Ⅱ（追跡調査）では、‘twin language’と双生児の親密性、社会適応の関係について明らかにすることを目的とした。

【方法】研究Ⅰ：ツインマザースクラブの会員の親 2733 名に自記式質問紙を郵送、回答のあった 1428 名（52%）のうち、‘twin language’が報告される月齢である 25～59 ケ月（2～4 歳）の 580 名を分析対象とした。分析に使用した社会的因子は、「ことばを使わない遊びをよくするかどうか」、「兄弟の有無」、「弟妹の有無」、「幼稚園・保育園に通っているか」、「祖父母との同居の有無」である。研究Ⅱ：研究Ⅰの 5 年後の追跡調査として、958 名に自記式質問紙を郵送、516 名から回答を得た（53.9%）。このうち、学童期（6 歳～12 歳）の 216 名を分析対象とした。

【結果】‘twin language’がみられると回答した母親は 282 名（48.6%）であり、双生児が「そっくりかどうか」や「性別」は‘twin language’の発生に影響せず、「ことばを使わない遊び」をよくする双生児ほど‘twin language’をよく使用し、「兄弟がいる」、「幼稚園・保育園に通っている」双生児ほど‘twin language’を使用しにくいことが明らかとなった。また、双生児の親密性は直接的には双生児の社会適応に影響せず、‘twin language’や「ことばを使わない遊び」といった言語的要因を介して社会適応に影響することが明らかとなった。

【考察】これまで、ほとんどの‘twin language’が幼児期に自然に消失するため、介入の必要性については議論されてこなかった。しかし本研究により、関係が親密な双生児ほど‘twin language’をよく使用し、‘twin language’を使用していた双生児は、学童期の社会適応が低い傾向にあることが明らかとなったため、‘twin language’を使用する双生児において何らかの言語発達を促す介入が必要であると考えられる。また、‘twin language’の発生と双生児の社会経験との関係が明らかとなり、兄弟の存在や幼稚園・保育園における他のこどもとの接触が、双生児に

特徴的な 'twin situation' を緩和し、母国語の発達を促す可能性があると考えられる。

論文審査の結果の要旨

Twin-language 現象は双生児の親の間では古くから知られている現象であるが、意外にも研究者の間では全くその存在すら知られておらず、手つかずの未解明な現象である。本博士論文は、国際的にも未解明な Twin-language の課題に社会科学的視点から始めて取り組んだ貴重な論文として学術的に高く評価できる。また、不妊治療の普及により多胎出産は急増し、言葉の遅れに悩む家族の相談は保健所でも目立って増えてきている。双生児の言葉の遅れの原因となっている Twin-language 現象発生の機序と関連要因を解明することにより、現象そのものの発生を未然に防ぎ、乳幼児の健やかな言語発達を促すことは社会的ニーズに合致する重要な内容を含む論文と考えられる。

調査対象は双生児の家族 2,733 例であり、安定した調査成績を得ることが可能な規模であり、調査対象のサンプリングは適切と考えられる。本論文では、ペア内の関係が親密なほど Twin-language をよく使用し、Twin-language を使用する双生児は、学童期の社会適応が低い傾向が明らかに示された。また、Twin-language の発生と双生児の社会経験との関係をパス解析を用いて数理科学的に証明し有益な結果となっている。兄弟の存在や幼稚園・保育園における他の子供との交流が Twin-language の発生リスクを低減させ母国語の発達を促すことを示唆する結果は今後、家族への保健指導の基盤になる重要な知見として評価できる。

上記の審査結果から本論文は、博士の学位を授与するに値する論文と判断した。